看護学生の対人不安と個人の内的属性との関係

高橋尚子[1)]，横田恵子[2)]，高間静子[2)]

1）富山医科薬科大学医学系研究科修士課程
2）富山医科薬科大学医学部看護学科

要　旨

本研究では看護学生の対人不安に影響する個人の内的属性について調べた．内的属性を，自我同一性，自己没入，共感的配慮，抑うつ性，コンピテンス，セルフモニタリング，社会的スキル，対人行動における自己効力感とした．対象はT大学医学部看護学科の1年生から4年生までの学生196名である．測定用具には自我同一性，対人不安，自己没入，共感的配慮，抑うつ性，コンピテンス，セルフモニタリング，社会的スキル，対人行動における自己効力感等を測定する既存の尺度を使用した．対人不安を従属変数とし，内的属性を独立変数としてこれらの関係を見た．さらに，調査対象の属性である学年，性別，年齢，兄弟姉妹数，親友，友人，対人交流において相手に意見を求める程度などとの関係をみた．その結果，看護学生の対人不安と自我同一性，コンピテンス，社会的スキルとの間に負の有意な相関がみられ，自己没入，共感的配慮，抑うつ性との間には正の有意な相関がみられた．しかし，セルフモニタリングや自己効力感との間には有意な相関はみられなかった．

キーワード

対人不安，自我同一性，自己没入，共感的配慮，コンピテンス

序　論

対人不安（social anxiety）は「現実の，あるいは想像上の対人場面において個人的に評価されたり，評価されることから生じる不安」[1,2)]，「対人的な状況により不安になりやすい傾向」[1,3)]，「他者からの詮索や注目，あるいは単なる他者の存在によって引き起こされる動揺や混乱」[1,4)] などと定義されているものの，その使われ方は研究者間で必ずしも一致していない．菅原は，「とりあえず，対人不安とは対人場面で個人が体験する不安感の総称である．」[1)] と述べ，相川らは「一つの研究領域につけられた名前といった程度に考えておくのが無難であろう．」[1)] と述べている．

宮下は「自分とは何者か」「自分の目指す道は何か」「自分の人生の目的は何か」「自分の存在意義は何か」など'自己'を社会の中に位置づける問いかけに対して，肯定的かつ確信的に回答できることがアイデンティティーの確立を示す重要な要素である．」[5)] と述べている．また，山田は自我同一性を「①自分の過去，現在，未来にわたる不変性と連続性の意識，②そのような自分を肯定し，未来に向かって意味のある歩みを続けているという意識，③自分が見る自己と社会が見る自己が一致しており，社会からも意味のある存在として評価され受け入れられているという意識」[6)] と定義している．自我同一性が高いと自分に自信を持ち，他者との関わりがうまく行え，対人不安は低いことが予測できる．

坂本は自己没入を「自己へ注意を向けやすく，自己へ向いた注意を維持させやすい傾向」[7)] と定義している．デュヴァルとウィックランドやカー

ヴァーとシャイアーの理論では「人の注意は自己か環境かいずれかに向けられている．自己が注意の対象となった状態では，人はその状況でどのようにふるまうべきかという行動の方針，すなわち，適切さの基準を意識するようになる」[7,8] と述べている．自己没入の状態にあると周囲に注意を払うことができなくなり，周りが見えず相手が必要としている行動に気づくことが出来ず，効果的に対応することができなくなる．この状態が続くと，対人不安が大きくなることが予測できる．

ホフマンは共感的配慮を「自分自身の立場よりも他の誰かの立場により適した感情的な反応」[9,10] と定義している．長谷川らは「相手の体験を我が身の体験のように納得し，相手に近づき，相手の自由な反応を許容し，自分の気持ちとしてどれだけ柔軟に受容できるかが理解の鍵である」[11] と述べており，このことは対人関係においても重要と考えられる．トラベルビーは「対人関係をめぐって，中等度から重度の不安があると相手の話を注意して聞くのは難しくなる．不安のためお互いは，離れたまま結び付けない．つまり，メッセージ全体に注意を向けることができなかったり，その関係から逃避しようとすることになるだろう．」[12] と述べている．また，フォーサイスは共感的な人について，「他者に対して，鋭い洞察力があり，想像力豊かな認識力をもち対人関係に関して敏感な人である．」[13] と述べている．つまり，対人不安は相手を知らない場合に生じる．共感的配慮ができるということは，相手をある程度分かっているということであり，つまり，対人不安が低いことが予測できる．

外口らは，抑うつ感情（気分）とは，「気がめいり，さびしくなり，悲しくなり，希望を失い，絶望的な気持ちになることである．」[14] と述べている．抑うつになると気分がめいってふさぎ込んでしまい，話すのがおっくうになり，人と会うのを避け引きこもってしまう．ということが予測される．ネズらによると，「抑うつの人は，非抑うつな人に比べ，対人関係を持つための働きかけが半数程度にすぎず，自分から話しかけることが少ない」[15,16] と述べ，また，「対人関係場面において緊張が高い」[15,16] と述べている．また，ファスラーらは「抑うつな人の特徴として，受動性を指摘し，否定的な環境から影響を受けやすい」[17,18] ことを示唆している．以上のことから，抑うつ性が高いと，対人関係に苦痛を伴うようになり，相手をよく知ることができず，結果として対人不安をもたらすことが予測できる．

Spitzberg & Cupach らは対人コンピテンスを「効率的に他者との相互作用を営む能力」[19,20] として定義しており，White はコンピテンスを「環境との交流の積み重ねの結果生じるもの，つまり効果的に環境と相互作用する能力」[19,21] と定義している．コンピテンスが低いと，他者と有効な関係が築けず，うまく付き合うことができない．そのことが原因で相手を理解できなくなり，対人不安が生じるものと考えられる．

セルフモニタリングの定義についてみると，岩淵らは「自分の置かれた社会状況の性質を察知し自己の表出行動や自己呈示を統制するときの社会心理学的過程である．」[22] と定義している．Snyder は「高い SM（self-monitoring）の個人は，状況的および対人的に適切と考えられる社会的行動を敏感にかつ実際的に行うことについて比較的柔軟で適合的であると自分自身でみなしている」[22,23] と述べている．また，「他者と知り合う初期の過程では，高い SM の個人は，社会的相互作用において活動的・率先的・指示的なアプローチをとる」[22,24] とも述べている．以上のことから，セルフモニタリングが高い人は，他人と接するとき，社会的状況に応じて適切な関係を特に不安無く築くことができるものと考える．

次に社会的スキルについてみると，菊池は「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）」[25,26] と定義している．相川によると，「具体的な対人場面において，対人的な目標を効果的かつ適切に達成できるような一連の行動と，そのような行動を可能にする認知能力のこと」[27,28] としている．これらのことから，高い社会的スキルのある人は，対人関係を有効かつ円滑に進めることができ，その結果，相手を知ることができ，対人不安が減少するものと考える．

Marry Ellen Doona は「看護とは，対人的なプロセスであり，それによってナースは苦しんで

いる患者の味方になり，患者がその体験に耐えて，その体験を理解するのを助ける」[29] ことであると述べている．看護師を目指す看護学生にとって，患者―学生間でコミュニケーションが十分に取れるようになることが患者を知る上で重要である．清水は自己効力感を「ある状況において必要な行動を自分で効果的に遂行できるという信念のこと」[30] と定義している．福井らは，「自己効力感（self-efficacy）が不適切なレベルにあると結果として対人場面で効果的な行動をとることが難しい」[31] と述べている．学生は患者とのコミュニケーションをとることが少ないため，効果的に患者との関係をすすめることが少ない．堀らが自己効力感を「挑戦したことを最後まであきらめない，突然起こった問題でもうまく処理できると思うなど，自分の行動を自分が統制し，必要な行動を効果的に遂行できるという可能性の認知および信念」[30] と定義しているように，自己効力感が高ければ，対人不安を少なくすることができるものと考える．

これらの文献を検討すると，次のような仮説が推定できる．1）自我同一性は対人不安に関係する．2）自己没入は対人不安に関係する．3）共感的配慮は対人不安に関係する．4）抑うつ性は対人不安に関係する．5）コンピテンスは対人不安に関係する．6）セルフモニタリングは対人不安に関係する．7）社会的スキルは対人不安に関係する．8）対人行動における自己効力感は対人不安に関係する．

本研究ではこれらの仮説を検証した．

研究方法

1．**調査対象**：T大学の看護学生259名（1年生から4年生　編入生を含む）を対象とした．

2．**調査内容**：看護学生の対人不安を従属変数とし，対人不安に影響すると考えられる自我同一性，自己没入，共感的配慮，抑うつ，コンピテンス，セルフモニタリング，社会的スキル，自己効力感を独立変数とし，これらの測定結果と自我同一性との関係を調べた．また，性別，年齢などの人口学的背景も調査した．

3．**測定用具**：測定用具には，多次元自我同一性尺度[32-34]，対人不安意識尺度[35]，自己没入尺度[36]，デイヴィスの対人的反応性指標の共感的配慮尺度[37]，自己評価式抑うつ性尺度[38]，青年のコンピテンス評価尺度[19]，自己モニタリング尺度[22]，和田の社会的スキル尺度[39]，対人行動における自己効力感尺度[31] などを用いた．いずれの尺度も信頼性，妥当性が確認されたものである．

4．**データの統計処理**：データ解析に伴う偏相関係数，標準偏回帰係数，α係数の算出にはSPSS統計ソフトを用いた．

5．**倫理的配慮**：この調査は無記名とし，誰の回答か特定できないようになっていること，結果は目的以外には使わないことを事前に説明し，調査の主旨に承諾が得られた者のみにアンケート調査を行った．

6．**調査方法**：調査票を配布し，回収は留置法により，回収箱に投函する方法をとった．

7．**調査期間**：2002年7月1日～2002年7月19日．

結　果

1．**調査対象**：調査対象はT大学の医学部看護学科の学生259名（1年生から4年生　編入生を含む）とした．有効回答数は196名（回収率：75.7％）であった．このデータを本研究の標本とした．表1には調査対象の内訳を示した．

2．**内的属性の測定に使用した尺度の信頼性の検討**：内的属性の測定に使用した尺度の信頼性係数（Chonbachのα係数）は表2に示した．

3．**対人不安と個人の内的属性との関係**

1）表3には対象者196名の対人不安と個人の内的属性との関係を示した．看護学生の対人不安と自我同一性，コンピテンス，社会的スキルとの間に負の有意な相関があり，自己没入，共感的配慮，抑うつ性との間には正の有意な相関がみられた．しかし，セルフモニタリングや自己効力感とは有意な相関はみられなかった．

次に，対人不安に最も影響する個人の内的属性をみると，自己没入であり，続いて自我同一性，共感的配慮，コンピテンス，抑うつの順であった．

2）表4には学年にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびにどの属性が最も対人不安に影響しているかを示した．自我同一性と対人不安との関係についてみると，3年生群以外には有意な負の相関がみられ，年齢が高くなるほどその傾向が強くみられた．

次に，自己没入と対人不安との関係についてみると，3年生群・4年生群の2群において有意な正の相関がみられた．共感的配慮との間には，1年生群・3年生群の2群に有意な正の相関がみられた．抑うつ性との間には，1年生群に正の相関がみられた．コンピテンスとの間には，2年生群に有意な負の相関がみられた．社会的スキルとの間には，3年生群に負の相関がみられた．

次に群別に対人不安に最も影響している属性についてみると，1年生と3年生では共感

表1　対象の背景

n=196

属性	群	数	%
学年	1年生	53	27.0
	2年生	47	24.0
	3年生	48	24.5
	4年生	48	24.5
性別	男性	8	4.1
	女性	188	95.9
年齢	18～20歳	120	61.2
	21～25歳	72	36.7
	26歳以上	4	2.0
兄弟姉妹数	0人	12	6.1
	1人	99	50.5
	2人	61	31.1
	3人以上	24	12.3
親友数	0人	3	1.5
	1人	13	6.6
	2人	35	17.9
	3人	51	26.0
	4人以上	94	48.0
友人数	0人	1	0.5
	1人	1	0.5
	2人	0	0.0
	3人	1	0.5
	4人以上	193	98.5
対人交流と意見の要求	求めない	11	5.6
	ときどき	101	51.5
	比較的	84	42.9

表3　対人不安と内的属性との関係

n=196

属性	PC	SP
自我同一性	-0.263**	-0.228**
自己没入	0.390***	0.295***
共感的配慮	0.250**	0.177**
抑うつ性	0.220**	0.191**
コンピテンス	-0.258**	-0.214**
セルフモニタリング	0.001	0.001
社会的スキル	-0.206**	-0.161**
自己効力感	-0.128	-0.102

***P＜0.001,**P＜0.01,*P＜0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）
SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）

表2　内的属性の尺度別信頼性係数

n=196

尺度		信頼係数	尺度		信頼係数
自我同一性尺度	全体	0.912	共感的配慮尺度	全体	0.771
	自己斉一性・連続性	0.860		想像性尺度（FS）	0.819
	対自的同一性	0.844		視点取得尺度（PT）	0.680
	対他的同一性	0.809		共感的配慮尺度（EC）	0.630
	心理・社会的同一性	0.823		個人的苦痛尺度（PD）	0.567
対人不安尺度	全体	0.965	抑うつ性尺度	全体	0.810
	Ⅰ．対人関係で緊張する悩み	0.813	コンピテンス尺度	全体	0.843
	Ⅱ．自分や他人が気になる悩み	0.635		社会的知識	0.638
	Ⅲ．集団に溶けこめない悩み	0.917		共感	0.865
	Ⅳ．多勢の人に圧倒される悩み	0.855		場のコントロール	0.791
	Ⅴ．自分に満足できない悩み	0.841	セルフモニタリング尺度	全体	0.619
	Ⅵ．気分が動揺する悩み	0.821		演技性尺度	0.589
	Ⅶ．くつろいで人とつき合えない悩み	0.731		他者志向性尺度	0.584
	Ⅷ．ささいなことを気に病む悩み	0.853		外向性尺度	0.369
	Ⅸ．生きている充実感がない悩み	0.857	社会的スキル尺度	全体	0.799
	Ⅹ．気分のすぐれない悩み	0.737		関係維持	0.848
	Ⅺ．目が気になる悩み	0.852		関係開始	0.624
	Ⅻ．変な人に思われる悩み	0.628		自己主張	0.704
自己没入尺度	全体	0.878	自己効力感尺度	全体	0.850

信頼性係数は，Chonbach の α 係数で示した．

表4　学年別にみた対人不安と個人の内的属性との関係

n=196

属性	1年生		2年生		3年生		4年生	
	PC	SP	PC	SP	PC	SP	PC	SP
自我同一性	-0.310*	-0.292*	-0.370*	-0.278*	0.082	0.074	-0.497**	-0.429**
自己没入	0.286	0.230	0.308	0.213	0.496**	0.385**	0.440**	0.268**
共感的配慮	0.376*	0.273*	0.067	0.046	0.531**	0.427**	-0.097	-0.063
抑うつ性	0.310*	0.317*	0.171	0.127	0.313	0.288	0.215	0.135
コンピテンス	0.009	0.008	-0.529**	-0.429**	-0.208	-0.165	-0.279	-0.199
セルフモニタリング	0.145	0.114	-0.029	-0.016	0.232	0.155	-0.310	-0.184
社会的スキル	-0.227	-0.199	0.095	0.068	-0.479**	-0.332**	-0.042	-0.031
自己効力感	-0.164	-0.129	-0.333	-0.264	0.126	0.084	-0.248	-0.202

***p<0.01,*p<0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）　SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）

表5　性別にみた対人不安と個人の内的属性との関係

n=196

属性	女性	
	PC	SP
自我同一性	-0.271***	-0.231***
自己没入	0.402***	0.306***
共感的配慮	0.261**	0.184**
抑うつ性	0.216**	0.186**
コンピテンス	-0.262**	-0.212**
セルフモニタリング	0.000	0.000
社会的スキル	-0.210**	-0.162**
自己効力感	-0.123	-0.098

***p<0.001,**p<0.01
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）
SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）
男性8名で回答数が少なく結果を出せなかった．

的配慮，2年生ではコンピテンス，4年生では自我同一性であった．

3）表5には性別にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびに8つの属性のうち，最も影響している因子は何かについて示した．男性8名で回答数が少なく，男性の結果は出せなかった．女性群においては，自我同一性との関係で有意な負の相関がみられた．自己没入との関係では正の相関あった．共感的配慮や抑うつ性との関係では正の相関があった．コンピテンスや社会的スキルとの関係では，負の相関がみられた．

次に，対人不安に最も影響している属性をみると，女性群では自己没入であった．

4）表6には年齢別にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびに8つのうちどの属性が最も影響しているかを示した．自我同一性と対人不安との関係では，18歳～20歳群，21歳～25歳群の2群で負の相関がみられた．次に自己没入と対人不安の関係についてみると，18歳～20歳群，21歳～25歳群の2群に正の相関が示された．共感的配慮との関係では18歳～20歳群に有意な正の相関があった．抑うつ性との関係では，18歳～20歳群に正の相関があった．コンピテンスとの関係では18

表6　年齢別にみた対人不安と個人の内的属性との関係

n=196

属性	18～20歳		21～25歳	
	PC	SP	PC	SP
自我同一性	-0.216*	-0.187*	-0.390**	-0.357**
自己没入	0.388***	0.304***	0.350**	0.257**
共感的配慮	0.346***	0.241***	0.131	0.108
抑うつ性	0.214*	0.195*	0.207	0.160
コンピテンス	-0.331**	-0.286**	-0.121	-0.098
セルフモニタリング	0.084	0.057	-0.162	-0.107
社会的スキル	-0.114	-0.087	-0.205	-0.165
自己効力感	-0.149	-0.118	-0.172	-0.143

***p<0.001,**p<0.01,*p<0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）
SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）
26歳以上群については4人と少数だったため結果が出せなかった．

表7　兄弟姉妹数別にみた対人不安と個人の内的属性との関係

n=196

属性	0人		1人		2人		3人以上	
	PC	SP	PC	SP	PC	SP	PC	SP
自我同一性	-0.301	-0.417	-0.282*	-0.243*	-0.265	-0.227	-0.584*	-0.515*
自己没入	0.638	0.700	0.381***	0.302***	0.190	0.123	0.551*	0.368*
共感的配慮	-0.211	-0.239	0.196	0.130	0.489***	0.331***	0.111	0.095
抑うつ性	0.211	0.189	0.137	0.127	0.307*	0.235*	0.014	0.010
コンピテンス	0.054	0.083	-0.223*	-0.163*	-0.255	-0.207	-0.395	-0.445
セルフモニタリング	-0.156	-0.199	-0.038	-0.025	-0.008	-0.004	0.055	0.035
社会的スキル	-0.178	-0.343	-0.288**	-0.216**	-0.329*	-0.237*	0.219	0.210
自己効力感	0.240	0.306	-0.141	-0.112	-0.213	-0.154	-0.305	-0.277

***p<0.01,**p<0.01,*p<0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）　SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）

表8　親友の人数別にみた対人不安と個人の内的属性との関係

n=196

属性	1人		2人		3人		4人以上	
	PC	SP	PC	SP	PC	SP	PC	SP
自我同一性	-0.449	-0.568	-0.613**	-0.446**	-0.269	-0.219	-0.206	-0.199
自己没入	0.463	0.309	0.372	0.195	0.329*	0.223*	0.450***	0.401***
共感的配慮	-0.065	-0.023	0.587**	0.407**	0.146	0.113	0.047	0.041
抑うつ性	-0.429	-0.256	0.292	0.201	0.405*	0.319*	0.062	0.060
コンピテンス	-0.245	-0.272	-0.109	-0.087	0.027	0.018	-0.342**	-0.323**
セルフモニタリング	0.147	0.081	0.393	0.185	-0.210	-0.130	-0.160	-0.130
社会的スキル	0.283	0.136	-0.023	-0.011	-0.434**	-0.349**	-0.229*	-0.196*
自己効力感	-0.381	-0.307	-0.537*	-0.376*	-0.065	0.044	-0.014	-0.013

***p<0.001,**p<0.01,*p<0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）　SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）
親友が0人の群は3名と少数であったため結果を出せなかった．

歳～20歳の群に負の相関がみられた．

次に対人不安に最も影響している属性についてみると，18歳～20歳群では自己没入と共感的配慮，21歳～25歳群では自我同一性が最も影響していた．26歳以上については解答人数4名のため，数が少なく結果を出すことができなかった．

5）表7には兄弟姉妹数別にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびに8つのうちどの属性が最も対人不安に影響しているかを示した．自我同一性と対人不安との関係をみると，兄弟姉妹数が1人群と3人群に負の相関があった．自己没入との関係では1人群と3人以上群に正の相関が見られた．共感的配慮との関係では2人群に正の相関がみられ，抑うつ性との関係では2人群に正の相関があった．コンピテンスとの関係では，1人群に負の相関があった．社会的スキルとの関係では，1人群と2人群に負の相関がみられた．

次に対人不安に最も影響している属性についてみると，1人の群は社会的スキル，2人の群は共感的配慮，3人の群は自我同一性であった．

6）表8には親友人数別にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびに8つのうちどの属性が最も影響しているかについて示した．自我同一性と対人不安との関係をみると，親友数が2人群で負の相関があった．自己没入との関係では，3人群，4人以上群に正の相関がみられた．共感的配慮との関係では，2人群に正の相関があった．抑うつ性との関係では，3人群に正の相関がみられた．コンピテンスとの関係では，4人以上群に有意な負の相関があった．社会的スキルとの関係では，3人群，4人以上群に負の相関がみられた．自己効力感との関係では，2人群に負の相関がみられた．

次に対人不安に最も影響している属性につ

表9　友人の人数別にみた対人不安と個人の内的属性との関係　n=196

属性	4人以上 PC	4人以上 SP
自我同一性	-0.269***	-0.232***
自己没入	0.403***	0.306***
共感的配慮	0.267***	0.189***
抑うつ性	0.248**	0.213**
コンピテンス	-0.232**	-0.189**
セルフモニタリング	-0.151	-0.099
社会的スキル	-0.180*	-0.138*
自己効力感	-0.128	-0.100

***p<0.001,**p<0.01,*p<0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）
SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）
友人数においては，0人群が1人，1人群が1人，2人群0人，3人群が1人と少数であったため比較できず，表には示さなかった．

いてみると，2人群では自我同一性，3人群では社会的スキルが，4人以上群では自己没入であった．

7）表9には友人の人数別にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびに個人の属性である8つのうちどの属性が最も対人不安に影響しているかについて示した．0人群1人，1人群1人，2人群0人，3人群1人と回答が少数であり，結果は表示しない．4人以上は193名の回答が得られたため，193名について表示した．4人以上の群において自我同一性と対人不安との間に負の相関があった．自己没入，共感的配慮との間には正の相関があった．抑うつ性との関係では正の相関があった．コンピテンスとの間には負の相関がみられた．社会的スキルとの間には負の相関がみられた．

次に対人不安に最も影響している属性についてみると，自己没入であった．

8）表10には対人交流において相手に意見を求める程度別にみた対人不安と個人の内的属性との関係，ならびに8つのうちどの属性が最も対人不安に影響しているかについて示した．自我同一性と対人不安との関係をみると，比較的多く求める群に負の相関があった．自己没入との関係では，ときどき求める群に正の相関があった．共感的配慮との関係では，比較的多く求める群に正の相関があった．抑うつ性との関係では，ときどき求める群に正の相関が示され，コンピテンスとの関係では，比較的多く求める群に負の相関があった．社会的スキルとの関係では，ときどき求める群に負の相関があった．

次に群別に対人不安に最も影響している属性についてみると，ときどき求める人の群では自己没入，比較的多く求める人の群では自我同一性であった．

考　察

1）自我同一性と対人不安との関係：自我同一性と対人不安の間で有意な負の相関を示した．これは，看護職者に対する調査報告[40]と同じ結果であった．Schlenker & Leary が，「不適切な自己像が提示されたときに対人不安が生じる」[42]と述べているように，自我が確立していない場合は対人不安が起こるため，と考える．学年別にみると，1•2•4年生群に負の有意な相

表10　対人交流において相手に意見を求める程度別にみた対人不安と個人の内的属性との関係　n=196

属性	求めない PC	求めない PC	ときどき SP	ときどき PC	比較的 SP	比較的 PC
自我同一性	0.277	0.455	-0.191	-0.154	-0.426***	-0.404***
自己没入	-0.514	-0.483	0.455***	0.368***	0.215	0.149
共感的配慮	0.689	0.845	0.158	0.114	0.264*	0.184*
抑うつ性	0.325	0.286	0.257*	0.229*	0.104	0.089
コンピテンス	-0.487	-1.228	-0.166	-0.141	-0.381**	-0.317**
セルフモニタリング	-0.554	-0.964	0.031	0.020	-0.106	-0.071
社会的スキル	0.001	0.001	-0.315**	-0.263**	-0.002	-0.001
自己効力感	-0.643	-0.444	-0.029	-0.024	-0.222	-0.179

***p<0.001,**p<0.01,*p<0.05
PC：偏相関係数（partical correlation coefficient）　SP：標準偏回帰係数（standard partical regression）

関が見られた．エリクソンが「アイデンティティーは，人生初期のすべての段階をとおして発達する」[42] と述べているように時がたつにつれ自我同一性は確立されていくものである．3年生ごろになると，自我同一性はかなり確立してきているものと考える．しかし，4年生になると臨床での実習が始まり，患者という病的心理を持った人の反応が予測できないことから，対人不安が生じているのかもしれない．

性別にみると女性群には負の有意な相関が見られた．「自我同一性が拡散すると女性の場合は不安傾向が高く，男性の場合は不安というよりは無意欲・無関心となる．」[43] という報告がある．このため，自我同一性が拡散されるため，対人不安が高くでたものと考える．

年齢別にみると18～20歳群と21～25歳群に負の有意な相関が見られ，年齢が高くなるほどその相関は強くなっていた．先に述べたように，自我同一性は年齢を増すごとに確立されるものであると予測される．

兄弟姉妹数別にみると1人群3人群に負の有意な相関がみられた．自己を確立していく際には他者との関わりが必要となる．兄弟姉妹との関わりの中で次第に自我を確立していき，対人不安も少なくなったことからきているものと考える．

親友数別にみると2人群に有意な負の相関があった．無藤は，「自分を感得しかつ他者の存在を感じとる感覚を，相互に促進しあうような関係を，人生の過程でいかにもちえるかということが，アイデンティティー形成のうえで重要な問題である」[44] と述べている．親友の存在はアイデンティティーの確立に関与したことからきていると考える．

友人数が4人以上群に有意な負の相関があった．高田は「青年期においては自分自身と同輩との比較が自己概念形成におよぼす影響力が大きい」[45] と報告している．多くの友人と関わり，自分と友人を比較することにより，自我同一性を次第に確立していることの結果と考える．

対人交流において相手に意見を求める頻度別にみると，比較的多く求める群に負の有意な相関がみられた．意見を他者に求めることにより，他者の考え・意見と比較でき，自我同一性の確立に有効に働いたことによるものと考える．

2）自己没入と対人不安との関係：自己没入と対人不安との間には有意な正の相関がみられた．これは，看護職者に対する調査報告[40] と同じ結果であった．バスは「対人不安が起こるのは，人から見られる自己を過剰に意識し，その場を逃れたい，人目を避けたいという動機が生じるため」[46] と述べている．このことから，自己没入と対人不安の間に正の有意な相関が生じたものと考える．

学年が3年生4年生に正の有意な相関がみられた．これは，学年が高くなるにつれ，ある程度の専門知識を獲得すると，自分がどうあるべきか，将来について考える機会が多くなり，自己没入におちいりやすい状態になるためと考える．

女性群に正の有意な相関がみられたのは，日常生活において，男性よりも女性のほうが自己に注意を向けやすいことからくるのかもしれない．

年齢別にみると18～20歳群と21～25歳群に正の有意な相関がみられた．この時期はおそらく，自分の将来について考えることが多い．そのため，正の有意な相関が出たものと考える．

兄弟姉妹数別にみると，1人群と3人以上群において正の有意な相関が認められた．兄弟姉妹がいると，自己を兄弟姉妹と比較し，自分を見つめる機会が多くなる．その結果，複数人のそれぞれにどのように受け取られているのか，どのように対応すればよいかということでの対人不安が高まることから，正の相関になったものと考える．

親友数別にみると3人群と4人以上群で正の有意な相関がみられ，その傾向は親友数が多くなるほど強くなっていた．親友が多いと助言を受ける機会も多くなり，自己を客観視できるようになる．つまりどの助言が自分に必要なことなのかなど，自己に注目することになる．相手の自分に対する反応が気になることからくるものと考える．

友人数別の4人以上群において正の相関がみられた．丹野・坂本らは「大勢の人に見られているとか，大勢の人を相手に話をしたり質問されたりするような場面では，緊張や不安が大きくなるでしょう．」[47]と述べている．付き合う人数が多くなるとこのような機会も増え，対人不安に陥りやすくなり，その結果として自己注目を生じやすくなり，自己没入へ移行するものと考える．

対人交流において相手に意見を求める程度別にみると，ときどき求める群に正の有意な相関がみられた．人は，他人に意見を求め，自分を見つめることで自分のイメージを確立してゆくものである．こうした過程の中で，菅原は「イメージ作りの失敗が対人不安を喚起する」[48]と述べている．自己没入して自分のイメージを作っていく人がイメージ作りに失敗したときに対人不安が生じると予測でき，このような結果が生じたものと考える．

3）共感的配慮と対人不安との関係：共感的配慮と対人不安との間には有意な正の相関がみられた．これは，看護職者に対する調査報告[40]とは異なる結果であった．看護職者の場合，これらの間には相関は認められていない．長谷川は，「共感は他者との交流によって体験される感情だが，それは相手に対する単なる好き嫌いではなく，いわば共感的な感情である．したがって，誰でも自分流の感じやすさの傾向があり，相手の感情のすべてに共鳴できるとは限らず，相手の態度や心情を認めること自体に拒否感を覚えてしまうこともある」[44]と述べている．患者と接する機会の多い看護職は，共感できないからといって，相手を知らなくて済むということは無く，対人不安の有無に関わらず，患者に共感を示さなければならない職種である．そのため，両者の間に相関は認められなかったものと考える．長谷川は「相手に関する関心がどれほど強いかが，共感的でありえるかどうかの分岐点になる．」[49]と述べている．対人不安が強い場合，それを回避しようとして，相手のことを知ろうとする．相手への関心が強まるということは，共感的配慮が強くなることであり，両者の間で有意な正の相関になったと考える．

学年別にみると1年生群・3年生群に正の有意な相関があった．1年生は入学により，見知らぬ人を，また3年生は編入生を仲間として迎える．デイヴィスは「他の人びととの関係を処理していくのに共感が欠かせないように見える」[50]と述べている．初めて会う人を仲間として迎え入れるとき，相手のことを知ろうとして共感的な態度をとることが予測できる．しかし，そうした行動をとる場合，まったく知らない相手を対象としているため，対人不安が生じる可能性は高い．

女性群において正の有意な相関がみられた．女性は男性と比べると，他者に対して関心が高いと考える．戸田は「共感性が発揮されるには，その前提として他者に注意や関心を向けている必要がある．」[51]と述べている．他者に対する関心が高い女性の場合，共感的配慮が高くなり，その結果相手を知ろうとする場合に対人不安が高くなるものと考える．

年齢が18～20歳群に正の有意な相関がみられた．年齢を重ねるにつれ，人は共感能力を身につける．共感能力が高まり，相手のことをよく知るようになると，相手の対応が気になって対人不安が高まると考える．共感能力が高まっても，対人不安が軽減するとは言えない．

兄弟姉妹数別にみると，2人群に正の有意な相関がみられた．戸田が「共感性が発揮されるには，その前提として他者に注意や関心を向けている必要がある．」[51]と述べている．兄弟が自分以外に2人いると，自分のみや1人の場合と比べ，兄弟間でうまく関係をとっていくために共感能力が育ちやすい．共感的配慮と対人不安との間に正の有意な相関がみられたものと考える．

親友数別にみると2人群で正の相関がみられ，これも兄弟数が複数人いる場合と同様なことが考えられる．

友人数が4人以上群で正の有意な相関がみられた．関わる人数が多いということは，様々な人に共感的配慮をしなければならない．フォーサイスは共感的な人について，「他者に対して，

鋭い洞察力があり，想像力豊かな認識力をもち対人関係に関して敏感な人である.」[13] と述べている．つまり，友人数が多ければ，それぞれに対する共感的配慮をもって対人関係を営む過程で洞察力や想像力も発達し，対人関係が円滑にできるようになる．このことより，友人数が4人以上群に正の相関がみられたものと考える．

対人交流において相手に意見を比較的多く求める群に正の有意な相関がみられた．他人に意見を求めるということは，相手との関係をうまく処理する能力が育てられる．デイヴィスが「他の人々との関係を処理していくのに共感が欠かせないように見える」[50] と述べているように，相手に意見を求めるときは共感が必要である．また，戸田も同様なことを述べている[51] ことから，共感的配慮には相手への関心度が関係していることが分かる．相手への関心の強さは相手を知ることで対人不安を軽減しようとする意味も含んでおり，正の有意な相関を示したものと考える．

4）抑うつ性と対人不安との関係：抑うつ性と対人不安との間には有意な正の相関がみられた．これは，看護職者に対する調査報告[40] と同じ結果であった．渡辺は抑うつの人は，対人関係を持つための働きかけが少ないと報告している[15]．対人関係の頻度は，抑うつ性が高いと低くなり，その結果，相手を知ることができず，対人不安が強くなるため，負の相関になったものと考える．

1年生群に正の有意な相関がみられたのは，大学に入学してきて，なれない生活や，見知らぬ学生同士の交流において，2年生以上の学年と比べると抑うつが強いと考えられる．ネズらが，抑うつの人は「社会的相互作用に対してあまり注意を払わないし，興味を持たない」[15,16] と述べているように，他者との関係が少なく，相手を知ることができないために対人不安が生じると考える．

性別にみると，女性群に正の有意な相関がみられた．女性は自己に注意を向けやすい傾向があり，その結果うつ状態に陥りやすくなり，正の相関となったものと考える．

年齢別では18～20歳群に正の有意な相関が認められた．この時期は大人へと変わってゆく時期である．大学で様々なことを体験する時期でもある．多くの悩みも経験し，抑うつ状態に陥りやすい．また，十分に周囲のことを吸収できていないため，自分に自信を持つことができず，対人不安が生じやすい．そのために正の有意な相関になったものと考える．

兄弟数の2人群，親友数が3人群，友人数4人以上群に，正の有意な相関がみられたのは，兄弟・親友・友人数が多いと他人と関わる頻度も高くなり，自分とは異なる他者の考えに触れることも多い．その結果ふさぎ込むことも少なくなる．他者を知ることで対人不安を少なくできることから，正の相関になったものと考える．

対人交流において相手に意見をときどき求める群で正の有意な相関が認められた．意見をときどき求めることで，人からどのようにみられているのか分かり，対人不安が弱くなる．その結果，抑うつ状態に陥ることはなくなり，正の有意な相関になったものと考える．

5）コンピテンスと対人不安との関係：コンピテンスと対人不安との間に負の有意な相関がみられた．Spitzberg & Cupach らが対人コンピテンスを「効率的に他者との相互作用を営む能力」[19,20] と定義している．これらより，対人不安が強い場合，効率的に他者との相互作用を持つことができずまた，環境と相互作用することができない．このことが有意な負の相関になったものと考える．

Adams はコンピテンスの構成要素には，社会的知識，共感，場のコントロールの3つがあると報告している[52]．2年生では，初めての実習があり，患者に対しての知識にも乏しい．また，「相手の身になってともに感じること」，つまり，患者の状態に共感する訓練もできていない．さらに，環境に対して，自分がコントロールしているという感覚も低い．つまり，コンピテンスが低いために，自分に対する患者の反応に不安が生じ，対人不安とコンピテンスとの相関となったものと考える．

性別にみると，女性群に負の有意な相関がみ

られた．Bellらはコンピテンスの構成要因を「自尊心や助け合い，同性・異性の仲間に対する満足度や仲間づきあいの困難さ，恥ずかしさ」[19,55]として定義している．Adomsは共感と人気度とは正の相関があり，特に女子においてその傾向が強いと報告しており[52]，そのことから，女子は他人からの評価（人気度）に敏感であることが分かる．つまり，女性はコンピテンスが高いことが分かる．そのため人付き合いがうまくいき，対人不安が生じなくなる．そのため負の相関になったものと考える．

親友および友人数別にみると，4人以上群に負の有意な相関がみられた．コンピテンスとは「環境との交流の積み重ねの結果生じるもの，つまり効果的に環境と相互作用する能力」[19,20]であるとすると，関わる人数が多ければ多いほどコンピテンスが高くなりやすいことを表す．その結果，友人数が多ければ，いろいろな考えを持った人と関わる機会が増えることで，対人不安が生じにくくなるものと考える．

対人交流において相手に意見を求める程度別にみると，比較的多く求める群に負の有意な相関がみられた．相手に意見を多く求めることができるのは，「効果的に環境と相互作用する能力」[19,21]（White）が高い人，すなわちコンピテンスの高い人と考える．対人不安があると，相手に意見を求めにくい．比較的多く求めることができるということは，対人不安は弱いことを表し，そのため，負の相関になったものと考える．

6）**セルフモニタリングと対人不安との関係**：セルフモニタリングと対人不安の間には有意な相関はみられなかった．「セルフモニタリングが高い者は社会的状況に応じて自己表出を変える傾向が強く，逆に低いものは状況を通して一貫した行動をとりやすい」[54]ことを考えると，対人不安があってもセルフモニタリングが高ければ，円滑に対人行動をとることができるということ，また，セルフモニタリングが低くても，生来，対人不安が少ない人にとっては何の影響力もないことが考えられる．

7）**社会的スキルと対人不安との関係**：社会的スキルと対人不安との間には有意な負の相関がみられた．菅原の「社会的スキルの欠如は確かに不安を高める重要な要素である」[55]との報告がある．また，和田の社会的スキルの関係開始・関係維持・自己主張等のスキルが高ければ人との関係がうまくいくということから考えると，対人不安は低くなる．このことから，負の相関になったものと考える．

性別にみると，女性群に有意な負の有意な相関がみられた．シャイな女性は，家庭という小さな社会に自らを閉じ込めているという報告がある[56]．家庭という小さな社会に閉じこもると，他者との関わりが少なくなり社会的スキルは発達しない．また，社会的スキルが確立されないため，他者とうまく付き合えず，対人不安を生じると考える．

兄弟姉妹数別でみると，1人群と2人群に負の有意な相関が見られた．デイヴィスは「役割獲得のスキルがうまく身につけば，ぼくらは自分の行動を他人の期待に効果的に合わせることができるし，そこからもっと滑らかな対人関係が生まれることになる．」[50]と述べている．兄弟がいる場合，家庭内でお互いに役割を見つけ出す能力が高まると考える．そのため，兄弟が1人2人いると役割獲得のスキル，すなわち社会的スキルが高くなり，滑らかな対人関係が生まれ，対人不安も弱くなるものと考える．

親友数が，3人群と4人群に負の有意な相関がみられた．また，友人数が，4人以上群に負の有意な相関がみられた．大渕が述べているように「社交性の高い人々は他者と一緒にいることを好み，人づき合いに積極的である」[57]ことから，親友・友人の多い群は社会的スキルが身につき，対人不安が少なくなることからきているものと考える．

対人交流において相手に意見をときどき求める群に負の有意な相関がみられた．相手に意見を求めることは，相手との関係を持とうとする意識の表れである．菅原は「対人不安傾向の高い人たちに認められるさまざまな問題は，彼らの内的な不安感よりも，彼らが他者との関わりを避けようとする行動上の特徴にその原因があ

る」[56] としている．しかし，「対人関係からの逃避傾向は，彼らにとって残された最後の対処方略なのかもしれない．」[56] と述べている．つまり，対人不安がある人は，他者との関係を避けようとするため，社会的スキルが身につきにくい．そのため負の相関になったと考える．

8）**自己効力感と対人不安との関係**：看護学生の自己効力感と対人不安には相関はみられなかった．しかし，親友数が2人群には負の相関がみられた．塚本は「一般的自己効力感が高い者は，積極的に物事に対処しており，不安，抑うつも低い」[58]，「自己効力感が高い患者は，ストレス事態で積極的なコーピング方略を用いており，また不安，抑うつが低いことが示された」[58] 等の報告はこの負の相関を説明するものである．

結　論

看護学生196名の対人不安と個人の内的属性との関係を検討した．その結果,自己没入・共感的配慮・抑うつ性は対人不安との間に正の相関がみられ,自我同一性・コンピテンス・社会的スキルとは負の相関がみられた．また，親友数の違いにおいて，自己効力感と対人不安との間に負の関係が見られた．しかし,セルフモニタリングと対人不安との間には関係がみられなかった．

謝　辞

調査にご協力いただいたT大学医学部看護学科の学生の皆様に深く感謝いたします．

引用・参考文献

1）相川充，渡辺浪二ら著：対人行動学研究シリーズ1　社会的スキルと対人関係―自己表現を援助する．pp112，誠信書房，東京，1996.

2）Schlenker, B. R. & Leary, M. R：Social anxiety and self-presentation a conceptualization and model. PSYCHOL BULL 92：641-669, 1982.

3）Argyl, M：Social competence and mental health. In M. Argyle (Eds.) Social Skill and Health. Methnen：158-187, 1981.

4）Buss, A. H：Self-consciousness and social anxiety. Freeman：1980.

5）中島義明，安藤清志，子安増生，板坂雄二，繁桝数男，立花政夫，箱田祐司編：心理学辞典．pp 4，有斐閣，東京，1999.

6）山田一郎　編：系統看護学講座　基礎10　行動科学．pp 32，医学書院，東京，1998.

7）堀洋道　監修，山本眞理子　編：心理測定尺度集Ⅰ―人間の内面を探る＜自己・個人内程度＞―．pp 58，サイエンス社，東京，2001.

8）Carver, C. S., & Scheier, M.F.：Attention and self-regulation A control Theory approach to human behavior. New York：1981 Springer- Verlag Dual, S., & Wicklund, R. A.：A theory of self- awareness：New York：Academic Press. 1972.

9）Davis, R. H：measuring individual difference in empathy, Evidence for a multidimensional approach. J PERS SOC PSYCHL 44：113-126, 1972.

10）Hoffman, M. L：The contribution of empathy to justice and moral judgment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), Empathy and its development. Cambridgr University Press Cambridg e：47-80, 1987.

11）長谷川浩，石垣靖子　河野雅資編：共感的看護　いま，ここでの出会いと気づき．pp19，医学書院，東京，1995.

12）Mary Ellen Doona Ed. D., R. N.：Travelbee's Intervention in Psychiatric Nursing Edition 2, 1996. 長谷川浩訳：対人関係に学ぶ看護―トラベルビー看護論の展開―．pp 96，医学書院，東京，1994.

13）Ruth. C ら著：Empathy in the Helping Relationship 河野雅資・永田久雄監訳:共感的理解と看護．pp 5，医学書院，東京，1991.

14）外口玉子，中山洋子，小松博子，原田憲一：系統看護学講座 専門25 精神看護学1．pp172，医学書院，東京，2001.

15）前掲書1），pp 162.

16) A. M. Nezu, C. M. Nezu & M. G. Perri : Problem-solving therapy for depression. Jhon Wiley & Sons, 1989.
(ネズ，ネズ，ペリ「うつ病の問題解決療法」. 高山巌監訳，岩崎学術出版社，東京，1993.)
17) 前掲書1)，pp 158.
18) Ferster, C. B : Functional analysis of depression. AM PSYCHOL 28 : 857-870, 1973.
19) 栗本かおり：青年のコンピテンス評価尺度作成. 社会学部紀行 78 : 145-153, 1997.
20) Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R : Handbook. of inter personal competence research, Springer-Verlag, 1989.
21) White. R. : Motivation Reconsidered : The concept of competence. Psychological Review 66 : 297-333, 1959.
22) 岩淵千明，田中國夫，中里浩明：セルフモニタリング尺度に関する研究. JPN J PSYCHOL 53 : 54-57, 1982.
23) Snyder M : Self-monitoring process. In L. Berkowitz (Ed.). Advances in experimental socialpsychology 12 :.pp. 85-128, Academic Press. New York, 1979.
24) Snyder, M : Cognitive, behavioral, and in terpersonal of consequences of self-monitoring. In P. Pliner, K. R. Blankstein, I. M. Spigel, T. Alloway, & L. Krames (Eds,), Advances in the study of communications and affect : Vol. 5. Perception of emotion in self and others. pp 85-128 Academic Press, New York, 1979.
25) 堀洋道監修，吉田富二雄　編：心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる（対人関係・価値観）—. pp 170，サイエンス社，東京，2001.
26) 菊池章夫：また／思いやりを科学する. 川島書店，東京，1998.
27) 千葉京子，相川充：看護における社会的スキル尺度の構成. 看護研 33(2) : 53-61，2000.
28) 前掲書1)，4-21.
29) 前掲書12)，1.
30) 前掲書7)，27.
31) 福井里江，熊谷直樹，宮内勝，畑哲信，本多真，本荘幾代，吉本真紀，池淵恵美，安西信雄，前田ケイ：精神分裂病患者の自己効力感—対人行動に関する自己効力感尺度作成の試み—. 精神科治療学 10 (5) : 535-536，1995.
32) 谷冬彦：自我同一性（第Ⅴ段階）尺度の作成 (1) －下位概念設定および項目選定に関する予備的研究. 日本心理学会第61回大会発表論文集 : 287，1997.
33) 谷冬彦：自我同一性（第Ⅴ段階）尺度の作成 (2) －因子分析および信頼性の検討. 日本心理学会第39回総会発表論文集 : 207，1997.
34) 谷冬彦：自我同一性（第Ⅴ段階）尺度の作成 (3) －妥当性の検討. 日本心理学会第62回大会発表論文集 : 263，1998.
35) 林洋一・小川捷之：対人不安意識尺度構成の試み—その2—. 横浜国立大学保健管理センター年報 2 : 23-41，1982.
36) 丹野義彦，坂本真士：自分の心から読む臨床心理学入門. pp32-33，東京大学出版，東京，2001.
37) 前掲書9)，67.
38) 前掲書36)，8-9.
39) 菊池章夫，堀毛一也編：社会的スキルの心理学. pp 186，川島書店，東京，1998.
40) 高間静子，圓山祥子，横田恵子他：看護職者の個人の内的属性の対人不安への影響. 富山医科薬科大学医学部看護学会誌 4(2) : 89-104，2002.
41) 大渕憲一ら著：対人行動学研究シリーズ5 パーソナリティーと対人行動. pp 86，誠信書房，東京，1996.
42) R. I. エヴァンズ著，岡堂哲雄，中園正身訳：エリクソンは語る－アイデンティティの心理学－. pp 57，新曜社，東京，1996.
43) 鑪幹八郎，山本力，宮下一博　共編：アイデンティティー研究の展望Ⅰ. pp 132，ナカニシヤ出版，東京，1996.
44) 鑪幹八郎山下格編：心の科学セレクション アイデンティティー. pp 57，日本評論社，東京，1999.
45) 高田利武，丹野義彦，渡辺考憲著：自己形成

の心理学—青年期のアイデンティティとその障害—. pp 32, 川島書店, 東京, 1996.
46) 前掲書36), pp 55.
47) 前掲書36), pp 61.
48) 前掲書 1), pp 16.
49) 前掲書11), pp 27.
50) 前掲書 9), pp 208.
51) 前掲書25), pp 118.
52) Adoms, G.R : Social competence during adolescence : Social sensitivity, locus of control, empathy, and peer popularity. Journal of Youth and Adolescence 12 : 203-211, 1983.
53) Bell, N. J., Avery, A.W., Jenkins, D., Feld, J. & Schoenorck, C. J : Family relationships and social competence during late adolescence. Journal of Youth and Adolescence 14 : 109-119, 1985.
54) 前掲書 7), pp 271.
55) 前掲書 1), pp 120.
56) 前掲書 1), pp 124.
57) 前掲書41), pp 20.
58) 塚本尚子:がん患者用自己効力感尺度作成の試み. 看護研究 33 (3) : 2-10, 1998.

The relationship between interpersonal anxiety and individual and internal attribution of the nursing students

Naoko TAKAHASHI[1], Keiko YOKODA[2], Shizuko TAKAMA[2]

1) Master Course of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University
2) School of Nursing, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract

The purpose of this study was to examine relationships between nursing students' negative self-awareness in interpersonal relationships and their internal attributions. The Internal attributions were ego identity, self-preoccupation, empathy consideration, depressive, competence, self monitoring, social skill and self-efficacy. The sample was 196 nursing students in the university.

The score of self-preoccupation, empathy consideration and depression showed positively correlation with their negative self-awareness in interpersonal. In addition, the score of ego identity, competence and social skill showed negatively correlation with those of their negative self-awareness in interpersonal. Also, the relationships between the self-efficacy and the negative self-awareness in interpersonal relationships were different by friends number. But the relationships between the self-monitoring and negative self-awareness in interpersonal relationships weren't observed.

Key words

negative self-awareness in interpersonal relationships, ego identity, self-preoccupation, empathy consideration, competence.